

そこにいる子が子どもであるということ①

背伸びする赤ちゃんの

指さす先には……

浜口順子

(大学教員)

大学という場所で、保育や幼児教育について授業をしたり研究したりするのが、私の仕事である。大学を卒業してかれこれ三十五年、講義で話す話題には事欠かないと言いたいところだが、正直なところ、講義室の前に立つと、「何も知らない」というぼっかりとした虚無感に襲われ、さて今日はどのように話をしていく自分になるだろう、と半ば不安、半ば開き直ったような気分になることが多い。その繰り返しである。

専門学校で非常勤講師をしていた三十年近く前のこと、夜間のクラスで、私はしつかり準備されたノートを読みながら授業をしていた。日中の仕事を終えてから学校に来る学生が多いので、うとうとしたり寝込んだりする者がいるのは仕方がないと思っただが、私語が多いのはさすがに周囲に迷惑だと思い、「こちらが話をしているのに聞かないのはおかしい」と注意をした。その時、教室の中央辺りで上体を机に横たえるようにしていた一人の学生が「そうかなあ」とつぶやいたのが耳に入った。その言葉が私の胸を突き、即座の応答はしなまま、どうにか授業を終えた。しかしその後、この言葉は私の講義に向かう気持ちを大きく変えさ

せた。「聞け」と言わなくてはならない授業をするのはプロではない、学生が聞きたくなくなる授業をするのが先ではないかと。それまでの私は、時間が余ってももつように、ノートに話題を詰め込んで用意していた。機械的な、ノルマをこなすような話し方では相手が退屈するこ

とはわかりそうなものなのに、小中学校の授業ならともかく、大人の学生に対する授業なら「聞いてくれるのが当然」と思っていた自分の愚かさに気付いた。「そうかなあ」というつぶやきを聞いて、学生一人ひとりがそこに息づいて在ることを感じたのだと思う。私の視界をぱっと開かせてくれたその学生には感謝している。

天空を指さす子どもの姿

前置きが長くなったが、新しい講義の導入部で最近よく使う一枚の写真の話をしよう。これは、お茶の水女子大学内にある小さなナーサリーの保育士さんが撮ったものだ。乳児クラスのこの畳の部屋には、午前中、南向きの窓から日が差し込む。その中で、まだ歩き始めて間もない赤ちゃんが、光に向かって右手の人差し指を



突き立てている。この世に生を享け、ようやく垂直に身を立てられるようになって間もない赤ちゃんが、見事にその総身の四分の一ぐらいを占める重い頭を支えつつ、一心に光に向かう姿。左足のかかとは床から少し離れるほど、体中が明るみへと引つ張られている。窓上に見える幾つかの丸い影は、水色、ピンク、赤、黄色の透明のビニールシートを保育者が切り取って貼り付けたもので、窓から差し込む光に色のバリエーションを与えている。窓の外の街路樹の揺れる葉陰も赤ちゃんの目にはちらちらと映っているかもしれない。

A・ポルトマンは、人は、その誕生時の依存性の高さから考えれば、哺乳動物として一年早く生まれ過ぎてきており（生理的早産）、この初期の寄る辺ない状況で過ごす一年間の経験こそが、社会性、文化性などの人間的特性の重要な根拠になっていると考えた。そうして、人は一歳の頃立ち上がり、歩き始め、言葉を話すようになるのだ。

この写真において、この子がまさしく「立つ」ことと「話す」ことのはざままで、キラキラと人間性を発揮しているのを目の当たりにする。寝返りが打てるようになり、地面の上を這い、水平移動をしながら世界を探索し押し広げてきた子が、重力という自然の抵抗を征服して、垂直に立つ。そして今や、日の光を視線の向こうに真つすぐに感受している。

立つことで自由になった腕や手は、人に物を作り出す能力を与え、さらにはシンボリックな表現を自在にする力ももたらした。「指さし」は発語の前兆行動であると行動学や心理学は教えている。犬などは、人が「あっちに行きなさい」と指さしをしても、ただ指先を見ているだけである。類人猿は「これが欲しい」という意味での指さしをするが、自分の興味の対象を他者に知らせるための指さしはしないし、その意味も解さないといい（M・トマセロ）。

「一茶の句」名月をとつてくれろと泣く子かな」が思い浮かぶが、その子も、まん丸として皓皓こうこうと天空に浮かぶ月を見、ある圧倒的な印象を受けて腕を伸ばしたのではないか。なぜ泣いたかは知る由もないが、「月が欲しい」というような即物的な欲求は超越していたのかもしれない。その感動は伝わらないまま自分の必死さをただ愛でてほほ笑むばかりの大人に対してむずかったのだと考えられなくもない。赤ん坊の写真をよく見ると、その左下の方に、その子を見守る保育者の腕が写っている。指さしは安心の源たる保育者の存在を背後に感じての行動である。赤ちゃんは「見て見て」と言わんばかりに指を空中に突き立て、保育者は同じ方を見上げながら温かく受容していたのではないか。

子どもが「真・善・美」など人間の普遍的価値は抽象されてきた。

古代から「真・善・美」などと人間の普遍的価値は抽象されてきた。しかし、この子が光の中で体験していたものは、「美しさ」だけではなからう。その感受性の基盤にある安心感という「善さ」でもあり、自然の恵みや豊かさという「真実」の感受でもあったのではないか。これらが渾然一体とした経験は、この子の生き生きしさという在り方に表現され、われわれを感動させる。津守真は「赤ん坊が高みの光へと向ける目、それを感動をもって見る大人の目の中に高尚な精神を育てる土壌がある。」と言った（『幼児の教育』第一〇五巻第三号 p.55）。そこに子どもが「いる」ということは、当たり前のことになりやすい。しかし、同時に子どもとして「在る」という見方を重ね合わせるときに、見える世界はぱっと変わっていく。